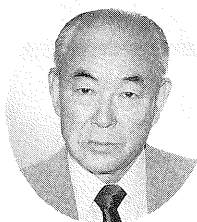


巻 頭 言



雑 草 予 備 軍

財団法人 日本植物調節剤研究協会 評議員
全国農村教育協会 代表取締役

広田伸七

ムラサキカタバミ（カタバミ科・多年生）は鑑賞用草花か雑草か？。都会の人に聞くと恐らく鑑賞用草花と言う返事が帰ってくるであろう。これが果樹や野菜栽培の農家では強害草と答えるに違いない。この相反する2つの答えはどちらも間違いではない。

ムラサキカタバミは花が美しいことから、明治時代に鑑賞用草花として輸入され、庭や花壇に植えられたり、鉢植えにして鑑賞された。それが何時の間にか逸出して雑草化してしまった。ムラサキカタバミは花は咲くが種子はできない、そのかわり地中に球状の鱗茎があり、そこに多数の子球ができて繁殖する。一度畑や果樹園に入り込むと、耕耘によって子球が拡散され畑一面に広がり防除困難な雑草となる。

草丈が高く、黄色の大きな花を咲かせるオオハンゴンソウ（キク科・多年草）も鑑賞用として輸入され、雑草化したものである。オオハンゴンソウは種子に落下傘のような冠毛があり、これが風に乗って遠くまで飛んでいって繁殖する。北海道の道は直線道路が多い、ここを車が高速で通り抜けると風が起こる。この風に乗ってオオハンゴンソウの種子は運ばれる。北海道の道路沿いや鉄道沿線には数kmにわたってオオハンゴンソウの大群落が続いているのをしばしば見かけるが、これはこうした理由で殖えたものである。

都会地周辺の空き地や道路沿いの雑草の約4～5割は帰化雑草だと言われている。その多くは、始めは鑑賞用や家畜の飼料用に導入されたものが逸出して雑草化したもの、或は家畜の飼料用に輸入されたトウモロコシ、大豆などに混入していた雑草種子によって広まったものである。自業自得、元を正せば現在の強害草の多くは人間が撒いた種である。マッチポンプを笑う

事は出来ない。

今年6月東京郊外八王子の浅川の川原を歩いてみた。意外な草を発見した。メリケンガヤツリ（カヤツリグサ科・多年草）である。数年前に神奈川の相模川の川原でみたが、その頃は八王子には見当たらなかった。かつて、京都の加茂川で川岸や石の間に群落をつくっているのを見たが、浅川の場合はまだポチポチである。しかし、この草の繁殖力は強い、分げつして新しい株をつくるとともに、多数の種子をつくる、若しこの種子が水に流されて水田に入り込んだら、想像するだけで恐ろしい。一度水田に発生したら、瞬く間に広がるのではないだろうか。多年草で繁殖力が強い。防除はミズガヤツリ、クログワイと同等かそれよりも難しいかも知れない。広がってからあわてても後の祭り。かといって、川岸に発生しているので、種子が水田に入り込まないという保障はどこにもない。

また、最近は酪農家の飼料畑でイチビ、アレチウリ、キハマスゲなどの外来雑草が大発生して問題になったり、有毒成分を持つヨウシュチヨウセンアサガオ、ヨウシュヤマゴボウ、カラクサナズナ、セイヨウカラシナ、オオオナモミなどの外来雑草による、中毒症状や異常乳の発生も起きている。しかも、まだ一般には名前もよく知られていない雑草も増えつつあり、なかには有毒雑草もある。

除草剤の開発試験も、こうした新しい外来雑草に対しても目を向け、研究も早いうちに手をつけておいた方が、発生が見られたときにあわずに適切に対処出来るであろう。

雑草予備軍に対する生態、防除の研究を真剣に考える時代ではないかと思うこの頃である。